



柳菴栗原氏校訂

重修

太閤記九編

真書

東都書肆 知新堂發兌

重修真書太閤記第九編目錄

卷之一

柴田勝家佐久間玄蕃を呼返す事
并羽柴筑前守大垣茂進發の事

卷之二

長濱の郷民筑前守を迎ふ事
并丹羽五郎左衛門尉發向の事
後藤又兵衛基次賤岳を保る事
并北國勢騷動周章の事

卷之三

待 8
459
81

同攻會印

羽柴筑前守賤嶽へ乗付玉ふ事

并序破急陣螺の事

七本鎗三振刀の事

并拜郷五左衛門退口の事

卷之四

北越の諸將難戦の事

并羽柴方七雄鎗先高名の事

佐久間兄弟賤嶽を出ふ事

并加藤孫六出立美麗の事

卷之五

柴田權六勝久玄蕃を救ふ事

并丹羽五郎左衛門尉陣中子於て病氣の事

柴田權六勝久玄蕃を諫る事

并原彦次郎再度の軍をとりむる事

卷之六

中興武家一番鎗古實の事

并加藤虎之助生笹指物の事

賤嶽七本鎗の面々をくらさの事

并盛政一人筑前守を覘ふ事

卷之七

柴田三左衛門尉討死の事

并毛受勝助忠誠の事

柴田勝家賤嶽を退事

并毛受勝助兄弟勇戦の事

卷之八

嶋元近毛受勝助を討事

并前田利家柴田羽柴両将へ對面の事

後藤又兵衛尉佐久間玄蕃允柴田權六を生捕

る事

并北庄籠城の事

卷之九

三女子北の庄茂出る事

并筒井順慶兩度使節の事

勝家并小谷の御方自害の事

并北國平均の事

卷之十

織田信孝濃列没落の事

幸若大夫の事

并柴田乃妾佐野柴田三之助子遇事

卷之十一

佐久間兄弟紀列へ落る事

并粉川法印諸浪人を誘ふ事

鷺岡十郎兵衛質使者の事

并粉川法印霧坂の城を取事

卷之十二

佐久間兄弟佐太の森合戦の事

并羽柴三右衛門尉寶寺へ落る事

中川秀春霧坂先陣を望む事

并澤井正太郎水難に逢事

卷之十三

霧坂城中軍評定の事

并中川秀春蜂屋塩川霧坂發向の事

大谷慶松謀て城兵を偽引出し事

并佐久間貴崎拔掛追討の事

卷之十四

佐久間兄弟難戦危急の事

并粉川法印馬術勇猛の事

并羽柴塩川霧坂に入事

并佐久間兄弟粉川法印危難の事

卷之十五

大坂御城普請の事

并四大工棟梁御尋の事

織田信雄内大臣に昇進の事

并四人の老臣評定の事

卷之十六

羽柴宰相秀吉卿長嶋登城の事

并近習の健士勇烈の事

北畠の老臣大坂へ来る事

并宰相秀吉卿反間の事

卷之十七

瀧川三郎兵衛反間子中る事

并三家老横死の事

内府信雄公と羽柴宰相秀吉卿再度梓楯の事

并濱松へ内府公の使者の事

卷之十八

尾藤甚右衛門尉説客の事

并片桐伊木異見の事

池田父子尾藤甚右衛門尉又約束の事

并濱松の御勢御進發の事

卷之十九

中川勘右衛門尉高之我意を振入事

并梶川平左衛門尉正繼中川を殺以事

池田勝入齋父子犬山を攻る事

并犬山没落清藏主戦死の事

卷之二十

池田勝入齋小牧山の邊を焼事

并森遠藤羽黒表へ出張の事
酒井九衛門尉奥平九八郎森遠藤を破る事

并野呂助左衛門尉父子戦死の事

卷之廿一

池田勝入齋稻葉入道犬山子備る事

并三遠諸士池田勢を欺く事

羽柴宰相秀吉卿大坂首途の事

并酒井左衛門尉忠次秀吉卿の軍配を知事

卷之廿二

池田勝入齋秀吉卿へ計略を勧る事

并秀吉卿勝入齋教諭の事

三好孫七郎秀次三列へ下向の事

并濱松乃智計諸將閑道を行事

卷之廿三

池田勝入齋岩崎城を乗取る事

并群鳥陣前子吉山を告る事

三好孫七郎秀次小幡原敗走の事

并堀久太郎軍配の事

卷之廿四

堀久太郎秀政遠三の勢を追返以事

并本多彦次郎武勇の事

森武藏守長一奥平九八郎信昌と合戦の事

并池田丹後守機變をたかる事

卷之廿五

森武藏守長一戦死の事

并池田丹後守園を破る事

池田勝入齋武勇の事

并三列の両金次郎の事

卷之廿六

片桐河合兩臣勝入齋を諫むる事

并井伊万千代の事

池田勝入齋戦死の事

并片桐河合兩人の事

卷之廿七

池田紀伊守之助戦死の事

并濱松御軍慮取智の事
小牧山諸手評定の事
并本多平八郎忠勝出勢の事

卷之廿八

本多平八郎忠勝砂川押の事

并永井與四郎馬を取返以事

加藤虎之助清正本多平八郎を知事

并秀吉卿兩雄を論じ玉ふ事

卷之廿九

本多水野夜討を議せし事

并羽柴方五ヶ所伏勢の事

羽柴方三列方對陣の事

并二重堀陣夜討の事

卷之三十一

後藤又兵衛高名の事

并加賀井竹う鼻落城の事

秀吉卿小牧山へ書翰をおくり玉ふ事

并長岡與一郎使節の事

重修真書太閤記第九編目錄終

重修真書太閤記九編卷之一

柴田勝家佐久間玄蕃と呼返を事

并羽柴筑前守大垣と進發の事

佐久間玄蕃元盛政の後藤又兵衛基次う栗山羽田

退城の時刻と談と聞てめしと打笑ひ何様辨舌

さるゆりし利害と説明たりそれゆてい栗山羽

田も侍らし聞ふと實に然あるまじき事

必竟某ヶ大岩山と打落したる勢又辟易して夜脱

みせんと思へとも又跡を追るうつさる九様

なる利口と申あるへし某う勢を以て此城と踏潰

さん何の手間ひま入へるさうい誠小朝飯前の
仕事あとも男道とて命をたむの切
殺さん罪作りうつ開運の前の不吉あれい云
まう命を助く其と洪大の思とおめ
早々馳返り約束の通り相違なく今夜初夜を限り
入退城をへ但時刻いさうも約束違ち即時
乗破るへ此義と能々兩人申達をへと嚴重
小陳説いけい又兵衛承る何とて約束の時刻
と違へ申へ其儀いさう御氣遣ひあるま
くい併如是大軍よあつめら徒然小暇のめ
てのこ有んも余野の人目如何あり依て晝の程い

紙玉よこの玉あ一の鉄炮を打出申へ此義も
御心得いへと申いさう玄蕃聞て都ふ紙玉の
玉ののとり鉄炮ある北國よの九様ある音
こらう兵器の因て不案内のことなれ責口は付
て楯竹束と設けんも暇つあう然に此方あて
も鶏の真似あて時こらう作をへと約束して又
兵衛と歸りけり又兵衛若うへり来山羽田に玄
蕃謂由と告いさう何もたれ息と繼て是と喜
ひ後藤う働と褒美し夫らう持場へ入足輕と配
めこの如く鉄炮を打とらうとも紙玉よこの玉あ
このこと故寄手の楯も竹束も付と餘野めこらうの

化粧軍とありたりけり賤岳よりめくして時刻と
 のらう今も筑前守大垣より引返すと何もくのび
 上うて待居けるものと堂木山の大金藤八の忽し
 心と變し佐久間方へ内通し味方より参るへさ由
 と約束しけると聞て江北の村々腕とささるり拳
 と握るるとの御土地侍のともく二の足を踏て
 佐久間陣へ趣き御旗さしめのと下されゆとて
 御味方より参りて軍忠とけいせしゆアアんと申け
 るよまう玄蕃弥心とさうしと江北を切平けんこ
 へ一日二日の間も定中へ然しと帝都も切上
 りまの朝廷と此方へ行幸なり奉りそれらう論旨

と以て山陽山陰五畿内と討平らげ天下の武將と
 あらん十日の外も出ると逸氣よるゆりける處
 へ柴田勝家の本陣中打尾山より使者と差立早々
 人数と打入然るへ勝て深入るへ大敗の本ふ
 り筑前守り武畧のゆゆも知如く奇と以て正と
 なり正と以て奇とを進退變化自在と得しとた
 とくハ蟄龍の雲霧に乗るふ似て人の意表も出
 ると其方も知ると大垣と當所とさうりふ十三里
 餘の行程あれハ彼處と大岩山の落しと知ぬと
 へるもあう然ハ筑前守り引返さんとも今四時
 五時の間あるへ筑前守駐付たうハ必定玄蕃允

敗北とて只今の内是非とも引返し此手と一つ
よはく合戦を丈夫に持ちゆへと再三匠作のいへ
述べてと述べて不破安井徳山并郷あといふこ
ま老練の匠作の申されぬ處十全十備の軍器と覺
えぬ白龍の魚服豫且の罟よめくると申すも勝て
兜の緒と申世話も加様の処を申すをゆへ然ら
へ御人数を御引上げ御帰陣然るへくゆと申げさ
へ玄蕃えいりうよも不審けあるおめらちと大よ
打笑ひ申げぬ匠作へ此手の容子を見ぬと縁へ
加様よ申越るも道理なり各へ正しく此處に在
て地の理とも知人の氣とも心得ありう左様よ臆

病と起しあふとも寝おひとあひしるふ尤不
と筑前守と怖ろしと思ひあふんよ何とて是迄
出陣しあひしと軍の圖といふめのめ分麗の間
よあるめのめと面々もめめて言めし知あふ處ふ
るふ大岩山の落しありそのうこの敵と何と見え
ふそめいのきもく遊支度してあるめのめと何とて
只今引返とへ筑前守り大垣より此處へ來るも
何さま四時五時の間あるへ但尤も早くうけ
付たらんよ馬も人も勞とそめめのめ用ふ立す
るよその勞たる處へ切めたり何ふ筑前
侍とも猛く働くと十分の軍切の立すりさふ

り兎角とるうち中打尾山より推下し短兵急し
攻め入る前後の敵を取りとまられたらんよの皆
皆の恐ろしとありひあふ筑前も必定戦死うさふ
くの擒もあるへさうていなり何とら面々いお
めひあふそとあさ笑へい安井徳山不破拜郷あさ
とてそ能天狗に付し若輩めめふ際とて
我々とおまうと輕侮したるめめい様やと心
中も深く憤とも知ぬ顔つくりて推返し何さま
玄蕃えのいさるあめひさるも冷しく聞えて
へとも匠作のいさる處へ猛虎の岩も憑飛鳥の
林も游よ似て奥ゆり力ありて覺え今一度

御思案いして然るへといつゝの玄蕃え氣色とりへ
左様よいさるうらゝの匠作の下知に付て軍とい
やあへ何とそあめ玄蕃う手い従ひあひしを
左る心の人達とい相伴あふて詮なくい急さ中打
尾山へ引返し老めあふ匠作と共堀へなりと
も溝へあり共落入あへやと苦々しくいられて四
人ひとしく一同も怒りを起るといへとも匠作の
あせると若氣よさる玄蕃なり各心と添て給よ
といこれいめのを若めめ如く同士軍をんも老
甲斐なり是へ一定柴田の運の盡る處なるへい
うふもしく盛政り敗軍と枚ひ取て侍の義理立

今も筑前馳來へうけ向て戦死し匠作の息は
 報ふへとこのひ定め此上の玄蕃元とのい
 るくみ従ふへと挨拶しけむ盛政のくそ笑ひ
 さも有へと云つ事もあけよ床机のめり諸
 軍と下知して居ける処へ前田孫四郎利長去十四
 日の夜父の本陣より引返しぬる由と告来りし
 の盛政大音よ足手まといの臆病武者それゆゑ
 けむと嘲り笑ひしを聞めぬものも玄蕃元を悪
 しとおのくぬめのも無うけうめくる處へ勝家の
 使とく毛受久左衛門を來りて申けるは勝て
 引負て進む共よ軍策の專要とあて處あり是れと

の事心得むとぬ玄蕃元とのいありは勝家申さ
 ばとも此場の引あふへとやうる頻り進て戦
 と持あふと實は危あけい早々御歸陣あるへ
 と匠作のつらうも嚴敷仰らまていと申けるを聞
 や否盛政立上り匠作のそれるとよ老いあふと
 今もて知さうしそや立歸り明日の都へ御馬と進
 めあふへとよて早くその御支度とすあへ軍
 の事ハ玄蕃元は御任をあまて申せゆとのひ切て
 更ふ久左衛門の口状を聞も入を久左衛門のあ
 しくへ免角暇とり内よ筑前引返し可申いそ
 是よ折合て軍をんよ此處のあしくいむう元弘

の軍も楠正成京都より宇都宮へ下ると聞て天王
 寺を引退さし例も御あひひへりと頻りも勸
 めしうとも玄蕃耳も聞入を覆るもあは捕るも
 あは今日へ引へる軍場もあは筑前へも馳付よ
 めしそれこそ忽ち打破りて猿冠者も猿舞とこそ
 んとするののたと云て其後の更も取合は久左衛門
 もあはれこそ中打尾山よるをうへり此由も勝家
 も告しうの勝家歎息してこそもく不了簡なる玄
 蕃えうあ此の勝家も腹切をんとの結構なるへり
 何とて敵を筑前とおのひげん今日の正しく玄蕃
 えおを我敵あは久左衛門罷向ひ是非も引立来を

然程も濃州大垣より四月廿日未刻も大岩山落
 城も中川瀬兵衛戦死の注進到来としうの筑前守
 使も向ひひりうも玄蕃えの直も引取たるうと問ひ
 使者も玄蕃の大军も其儘陣取て罷在いと答ふる
 と聞と其も立上り踏々と芝も鳴り腰刀と抜
 て額も當軍も勝たるそあひの外の外早うりしを
 やと五六度呼らり馬引とありける時舎人例の大
 鹿毛を引出たり是は明智左馬助も湖を渡した
 る名馬なり筑前守馬も乗あはる茂助もと呼らり
 けるよあり堀尾馬の前も立て轡と押えしうの筑

前守別義（つらぎ）あり其方（そのかた）の命（いのち）と貫（つら）ひたりといひ茂助（もすけ）のつこと笑（わら）ひ安（やす）と御事（ごごと）の元（もと）より命（いのち）とい奉（たま）り置（おき）しものと事（こと）新（あらた）らしくも仰（おほ）らまひぬのうあんと答（こた）へけるあつ筑前守（つくぜんし）然（しか）者（もの）其方（そのかた）大垣（おほがき）に留（とど）りゆへといこれけるを聞（き）て茂助承（うけ）こりゆ氏家内膳（うぢいけうちずき）の事（こと）にていへし畏（おそ）りゆと申（ま）時（とき）筑前守（つくぜんし）是（こゝ）一（ひと）大事（おほいごと）の役（やく）なり併（ひら）其方（そのかた）ありてい是（こゝ）と勤（こゝろ）むといふそのめなり念（ねん）入（い）るといひを皆（みな）々（々）續（つ）げと聲（こゑ）の下（した）より一（ひと）散（さん）ふ駈（か）出（い）しあつ近習外様（きんじゆがいさま）の若（わか）めの共（とも）我（われ）もくと跡（あと）と慕（ねが）ふと走（は）りけり筑前守（つくぜんし）路（ぢ）々（々）我（われ）の羽柴筑前守（はしばしつくぜんし）あり大事（おほいごと）の所用（しよう）ありて江州（えしゆ）へ急（いそ）と帰（か）るより追々（おひ／＼）來（き）る我（われ）人数（にんごう）

幾（いく）千万（せんまん）あるとも申（ま）合（あ）とて食（く）事（じ）と與（あ）つと其（その）外（が）馬（ば）の沓（くつ）草（くさ）鞋（ぜ）馬（ば）の秣（ま）とて用意（ようい）とてその代物（しろもの）の三（さん）陪（ばい）りして取（と）るるとと觸（ふ）つと走（は）りあふより在地（ち）の地下人原（ちかじんげん）我（われ）もくと食物（じきぶつ）以下（いげ）と持出（もちだ）してあれと與（あ）えしより三四万（さんしゆばん）より余（あ）る軍兵（ぐんべい）一人（ひとり）も飢（う）めぬと夜（よ）ともいふ所（ところ）馳（か）たりけり此時（このとき）勝家（かつや）の岐阜（きふ）の三七殿（さんしちだん）へ使者（しや）と遣（つ）りしよりいふと筑前守（つくぜんし）と喫留（くつりゆう）て江州（えしゆ）へ歸（か）るかあ然（しか）らぬ我等（われら）江州（えしゆ）と切平（きりへい）け申（ま）へし前（ま）に岐阜（きふ）の城（しろ）つと後（のち）に江州（えしゆ）の戰勝（せんじやう）たつと筑前守（つくぜんし）守（まも）りゆと猛（たけ）ととも狼狽（ろうたい）とんと疑（う）ひしととくをる内（うち）に我等（われら）も濃州（のうしゆ）へ發向（はつかう）しゆとんといひけるよ

不思議あるうふ此夜大雨車軸を流しひるまゝ
呂久江渡の両川俄に出水し使者川を渡り得と三
七信孝勝家の使ありとも大垣を襲らんことを計ら
しうは是も洪水をええらきて手と空しくなりた
うひるまゝ筑前守おのひのまゝ江州へ引返
とこと得たりしなり

甫庵本太閤記に癸未卯月廿日未の刻秀吉小姓
馬廻り弓鉄炮都合其勢一万五千と率一濃州大
垣と立諸鎧と合を急とあへる氣象のうある天
魔破旬も向ふへくも見へさうひる良有て堀尾
茂助の氏家内膳り心と引見んと思ひ云様の秀

吉難義の程りう思召は又當城は御座いと
んゆと尋ひしといされぬ岐阜への手當と沙汰
置某も秀吉卿の御跡とくろめいんやうて
參陣をんとて貝とあうせの初りと出しひしめ
さ合うしう堀尾茂助も安堵し六人のめの共
ふ云様の氏家り心と變りあひ引付一着と極
めゆへ心腑は銘しあひひし目出度とあ
それへ内膳も柳瀬へ只今趣とこといひうの内
膳と引つと參陣有とこと云ひは悦あ
つりつと申の下刻は大垣と出汗馬の鞭隙あり
急とまゝなりとあり

重修真書太閤記九編卷之一終

重修真書太閤記九編卷之二

長濱の御民筑前守と迎ふる事

并丹羽五郎左衛門尉發向の事

濃州大垣城に殘さる堀尾茂助吉晴は今年四十歳脊力既壯武勇世に許されしものゆゑに早くも筑前守の意を悟り是は氏家内膳と疑ひおのゝろしよる我一命を呉るといふれしあらん然に内膳の心中と引見らゆとおのひ本丸に入て氏家と面會を堀尾と見ていふに茂助との御邊に筑前殿の御方とて一二の者あるに何とて爰に殘

大垣記九編卷二

うゝひしそ然ハ此内膳と二心のめのこと思はれ
う抑某と稻葉安藤ハ當國の三人衆といはれし
のひらり我等父よりいふト全齋藤龍興と疎之總
見院殿より従ひ参らるし以來二心なく仕奉り
父ハ長嶋の軍に命を棄さう併そのしめと云ハ
筑前殿のまゝ木下藤吉郎といはれし時厚く取持
をゝひし舊好あり何とて腹黒あることとハあそ
さそとのふ茂助是を聞て何様氏家殿と稻葉安藤
両家の當國の名家あり何事あると思立あふと
のあゝん時誰うハ下知と背さ可申然ハ筑前守も
氏家殿とい何程うあそろしこのめよ思ひ居はか

う但筑前も今度の軍ハ能々難義の合戦なるへ
覺ハ氏家殿ハ何とあやしゆしゆやうんと問ハ内
膳答て申様如何も筑前守殿難義の合戦あらん
とい誰々も申へくはそれハ只今までの如く織田
殿のしるしよりつる代と見ての下墨より織田殿を
てよ滅ひむへう天下の主といふめめいさ定ま
らハ柴田ハ織田殿の家老なりとも我意はる然
も己う勇氣も慢し人ともあつたはるその上
も嫉妬深く勿々以て天下の武将たるへさ器量
あゝハ其甥の佐久間玄蕃えす勝家も劣らハ偏
執はるし其上も諸將も無禮あると以てゆりとも

玄蕃と疎く勝家と輕くと又織田殿の御子なれとも
三七殿武勇と好まれの計りて又事やうく禮義と弁
へあつたの御父右府のたあの大忠功と立たる羽
柴殿と柴田と同一様におゆこれ却て柴田より申
付て筑前守殿と討つあさんと企てあふと偏り天
魔の所業とおゆえの丹羽五郎左衛門へ思慮深さ
ののなれ共少量よりて大器にあつた龍川の邪智
深く人と知の眼あひさへ國二つとも治むへうり
筑前殿の五畿内大りの御領知のうへうり近江國と
よひ播磨美作備前備中備後まで御手下屬たり
然い今より後天下と切從へあふ筑前守殿よあ

らびく誰うあつた某あとも舊好なれの定め
て思召忘とあふといあるす此城にあつて岐阜
を押えよとい仰らさなれとも呂久江渡の洪水
六日七日と落つと見へ然らぬ岐阜より軍兵
を出とも急々よの叶ふへうり因て徒然に當
城に在て岐阜を押えんより賤嶽へ馳向ひ筑前
殿と手と合をんと思ふなりと云なりう螺と吹立
て人数を集め幟と取出し旗指物とてこし手配を
なり打立けりを見て茂助大悦ひ嗚呼命一つ捨
ひたり内膳殿の變心と生し岐阜と一州にあつ
とあひあひ御邊と引組差違んと思ひし此御容

子よての最早茂助ウ命をそのるふ及と云て
大ニ笑ハ内膳聞てのらさま此時節なり筑前守殿
の疑これも最あり去なり前も申如く今
り後天下の大將となり給ふへ筑前守殿と敵と
とる身の程しと多あり去り去り賤り
嶽へ出るるとの侍の中誠ニ柴田と共に死生を
同くせんとおめふめの幾許もあらし前田父子
金森佐々木と決て裏切し筑前守殿と一川とな
るへさなり見あへ堀尾殿といひなり馬と打
のり申の下刻ニ大垣と打立江州さし馳向ふ筑
前守殿の大垣と立あひし未の下刻なり玉村と

藤川との間ニ至りあふころの大鹿毛と乗倒し
あふこの道より五里餘ニ過り名譽の駿馬か
しともいうよりしけん膝を折て臥しとありその
時日を暮れ及ひたりける春照野の稱名寺
といへる門徒平日筑前守の顧を請ける是時節
御迎ニ参らていありぬとて菓子を持参
し慰め奉り馬と求出して御供申ける筑前
守大喜ひ事平さし後寺領あり寄らしと
又長濱ハ筑前守久しく在城あり処は地下
人との年ころの恩義を忘れし松明
と幾千万となく山々峯々をとりと間あり

燈^{とん}のつきて大将の御迎^{ごむかひ}と出立^{いでだて}ふと大垣街^{おおいのまち}
道のあつらふと白晝^{びやくしやう}の如^{ごと}しされは是^{こゝ}とたふりと
して酉刻^{うしとく}をりり^り大将木の本^{だいじやうきのほん}に馳付^{ちつ}地藏堂^{ぢぢやうだう}の廣^{ひろ}
庭^{にわ}に下立^{くだだて}て暫時^{ざんじ}休息^{きゆうしやく}しあふんと追々^{おひおひ}ふりけ着^つ
二万^{にまん}に近^{ちか}る軍勢^{ぐんせい}一人も恙^{あや}なく馳集^{ちあつ}るの車長濱^{くるまぢやまは}
の町人^{まちびと}とも催役^{さいやく}よりうて聞^きえ^り筑前守^{ちくぜんしゆ}天
下^{てんか}と治^ちめ^り最初^{さいしゆ}に長濱^{ぢやまは}の町人^{まちびと}の屋敷^{やしき}地諸役^{ぢしよやく}免除^{めいじゆ}
しあひ^りなり去程^{さうぢやう}お筑前守^{ちくぜんしゆ}の小性^{せうせう}馬廻^{ままわ}り弓鉄^{ゆづてつ}の衆^{しゆ}
あて一人も残^{のこ}らぬ悉^{しつ}く馳着^{ちぢやう}たりしうらなまの味方^{あじな}
の砦^{とりで}々々^{々々}に籠^{かこ}るの共^{とも}に力を付^つけたため木本の浪人^{なみのり}
美濃部^{みのべ}勘左衛門^{かんざゑもん}といふ者を召出^{めいしゆ}され酉下刻^{うしげとく}の暮^{くれ}

よら^りと^り此邊^{このへん}の地下人^{ちかぢやうびと}ともと田上山^{たのやま}に上^あら^せて
鯨波^{くじなみ}の聲^{こゑ}と揚^あげ^りる折節^{せつせつ}筒井^{つづみ}の家老^{いへぢやうら}島左近^{しまささ}此
處^{こゝ}へ御迎^{ごむかひ}と^り罷出^{まは}り神速^{しんそく}の御出馬^{ごしゆま}のつもの御軍
畧^{りやく}とい申^まあ^りる此度^{このたび}の御作畧^{ごさく}に別^{わか}れて感心^{かんしん}仕^まり
し恐^{おそ}る申^ま条^{ぢやう}なれとも異國^{いこく}の孔明^{けいめい}我朝^{わがぢやう}の捕^とと申^ま
共^{とも}勿^な々^々以^もて及^{およ}び^りひ^りと^り言^い上^あを^り筑前守^{ちくぜんしゆ}
との対悦^{たいえつ}ひ何^{なに}さまと^りこの機密^{きみつ}に其方^{そのかた}な^りて
知^しあ^りるま^り追付^{おひつ}勝関^{かつせかん}と揚^あげ^りるそのけ^け
そ^のげと下^{くだ}知^ちしあ^りへ左近^{ささ}の筒井^{つづみ}陣所^{ぢんじよ}へ走歸^{しゆき}り
その近邊^{ちかへん}の砦^{とりで}々々^{々々}へ大将御着^{だいじやうごぢやう}ありし由^{よし}と觸^ふたりけ
しは只今^{ただいま}やと閑退^{かんたい}るゆとあめひ^りの共^{とも}のつと

六甲巳乙編卷二

もいづも勢をまゝ越前勢と打破りて大将の御
 威を預らんとひしめきあへり取系賤岳へい忍ひ
 みるまゝのものと以て只今木本へ着陣したりゆり
 て北國勢と追討しうのつとさなりと仰遣はさる佐
 久間玄蕃乞の夜に入あひ賤ヶ嶽を請取んと深々
 と寄て陣と取りとすなれい後より筑前守の大軍押
 寄しことを知るとも急し引返をへさこともあしり
 たく只つゝぬ休まて威風とあるひ備へさる此時
 丹羽五郎左衛門尉長秀ハ若州并又江州二郡を領
 一坂木ふ在城したりけるう日頃心を筑前守ふ寄
 たりしうハ越前勢と襲はるゆとあひの嫡子長重

一軍兵三千人よさ一添敦賀口へ出張をしむ是ハ
 北國武士の後と断んと計畧なり又塩津海津ふ
 も七千人と伏置たり然るふ四月十七日羽柴筑前
 守美濃路へ出張の由と聞さてハ賤岳邊の砦々
 籠る所の兵士等う上も心元なるとて家臣坂井與
 右衛門江口三郎兵衛望月文九郎以下小姓馬廻り
 千餘人と召連酒肴多く用意し船五六艘と取乗且
 陣見舞且ハ加勢の心よて同く廿日ふ出陣しけ
 り鉄炮の音厳しく湖上ふ響さるさうける故船
 屋形ふ登り遠目鏡と以て見るとハ賤岳のうこ
 二あさう旗馬印あひたさる立騒さける長秀ハ

のし様是ハ北國勢羽柴方の砦と責落一其競ひと
外々の砦へ向ふと覺えさう急さ船と汀へ付ると
下知しひさハ坂井與右衛門江口三郎兵衛太田小
源太承らういふ御錠の如くなるへ急さ坂
本へ漕返一堅固と御籠城然とくひと諫しうハ
長秀聞てされいと弓矢取ハ名とあそあしめ身
の成行ハ朝夕とすさ名ハ百年の後と傳らう苔
の下まて朽ぬののちう筑前難義の軍とあし追
出陣したしハ定らう知らう坂本へ引返一籠城
したしハ長秀う弓矢ハ長く棄らう一海津へ遣と
一置たる勢と三川と分て一分ハ海津と残一二分

ハ賤岳へ参らう一溝口金右衛門秀勝村瀬次郎右
衛門能朝も來らう一と書状と認り判形と船と
押戻し急けと下知しひさハ使と立一翌月文九
郎御意のひへとも五里漕戻しと勢と調へさ
五里の路と漕返らうひらう只今の役と立ひさ
申ひさハ長秀のやとも軍の期の延るといふと
あり長秀賤岳へ加勢と聞あしハ定めて大勢あり
んと思ひ寄手と猶豫の心有らう五里往還しとも
間と合へさうのそけと下知しと船と押返
させ其身ハ汀とさして早めけり
後藤又兵衛基次賤岳と保る事

并北國勢騷動周章の事

去程うらむち丹羽五郎左衛門尉長秀ながひでへ船ふねと渚しづみへ付賤岳
 へと押行おしゆき所ところは味方あじかたと覺おぼしと武士ぶし十人許うらぐち手負ておひと助
 けて來ると見付長秀ながひで聲こゑうけ誰たれと問と彼者かた共とも長秀ながひでと
 見知みちたるよや畏おそり是こゝへ中川なかつがわ瀬兵衛尉せべゑり手ての者ものふ
 ひ今晚こんぱん大岩山おおいわやま越前勢えちぜんせいの為ために攻せめ拔はと瀬兵衛尉せべゑ亂軍らんぐん
 のうちには戦死せんじしそのうち高山殿たかやまのどのへ砦とりでと棄すて落おら
 せし間賤岳まけんせつとてめ砦とりで々々々々のとも持もちえ難がたく
 落お支度しどのともいひこれいと答こたへ五郎左衛門尉ごらべゑのみと
 と聞き賤岳けんせつの加勢かせいとて丹羽五郎左衛門尉にわごらべゑ只今ただいま參
 り着きたりとのめ安堵あんどうしといへと觸ふさるとめとよ砦とりで

砦とりでの軍兵ぐんべいとも色いろと直ただして丹羽にわり加勢かせいの入城いりじやうと待
 居まちたりけり翌日あした廿一日にじゅういちにち大澤村おほさわむらより筑前守ちくぜんしゅ賤岳けんせつへ
 上あらむける時とき五郎左衛門尉ごらべゑへ大音村おほねむらより賤岳けんせつへ
 上あり坂中さかぢゆうより筑前守ちくぜんしゅの面會めんかいありけり此こゝへ秀吉ひでよし長秀ながひで
 の加勢かせいと厚あつく悦よろこみけり此こゝとも知しり佐久間さくま玄蕃げんぱん
 へ賤岳けんせつ城中じやうちゆうへ使者しやしやと立た日ひ既すでに黄昏たふしふ及および早はや
 早城はやしろを渡わたりとい言い遣つかり城受取じやううけとの役人やくにん夫々それぞれ城
 際さかいへひりくと寄付よせつけけり城中じやうちゆう以外いげは周章しゆうぢやう一如
 何なにとんと狼狽ろうたいしけりを見て後藤ごとう又兵衛使者べゑしやしやと對たい
 面めんし只今ただいま開城かいじやう退出仕でしゅしいと挨拶あいさつして使者しやしやと返かへり其後
 城中じやうちゆうと走廻しゆうかいり晝ひるの程ほどを紙玉かみたまとめり化粧軍けしやうぐんあり

大内記九編卷二

今よりい真玉とあめて打拂つやと下知しける
 みづろ何も畏りぬと答へて強薬を以てこめ替く
 打つとて城受取の役人共散々打倒されたり
 山羽田あひ何故と仰天とて又兵衛あさ笑ひ城
 と渡さんと一言い今宵一夜と延さんよその謀か
 夜陰の城責うあふやいけい佐久間いりや猛
 しくも自然引退て夜の明と待あらん夜明か
 筑前守殿必定駈付あふや若又玄蕃怒て夜と
 もいとい責うらひあれと討んを充安うら
 尤もと驚く車うらと云て猶足輕下知し頻り
 打をけるうらう玄蕃侍大崎六郎といふの

城際ふ立顯れ何故ふ約束と違へらるそ其儀
 あらひ只今城乗微塵よさんと言うげると聞
 又兵衛矢倉より自身鉄炮を取火蓋と切誤を
 大崎う咽輪の外と打枝ぬとい二言といを死
 してけり玄蕃えいあれと見てい其義ならひ只
 一のと踏つふと獅子奮迅の怒りとて進
 らげると并郷五左衛門馳來り後藤又兵衛とゆら
 んと欺とこの口惜さ去なり夜陰の城責の敗
 軍の基より今暫時休めへかと諫めけるよる玄
 蕃の塩とやあひげん攻口といさう引退
 樹陰と便りよ屯をり素山羽田の既引退て落

行んとせし寄手の引退しを見て又立返り又兵衛如何せんとするおと問ひける時又兵衛少も騷る夜陰の城責延たまひ必定未明も寄來りその頃城中も一時あはれゆる筑前守殿とび五郎左衛門尉の加勢到着とせしりつうの問あり待遠しとも堪えぬやと諫めける又中打尾山の柴田勝家の佐久間の体と心元は思ひ我身も今市村と東野村との間狐塚といふ處へ陣と移し玄蕃も是非とも爰まで引ひへと使と立ける處は玄蕃の陣中も誰といひし筑前守の先鋒との馳付たりと言出し上と下へと周章は拜郷五

左衛門の賤岳の城中も頻りに関を作り螺を鳴し勢晝の程も引替りし体は驚き見渡をい何の若もても同し関を合を螺を吹是は何さよ只事あらしとおのひ玄蕃の陣中へ駈來り夜曉の急さ城を攻抜へしと手配をいけるは兎角陣中の雜説静し筑前守の勢五万といひ六七万といふのとさ峯々谷々松明なるぬ處もあし玄蕃の大崎對馬守と呼出しあ松明の何のそと見えて參ると下知しけるは大崎承る駈出は猶も心元あくや思ひげん今井角次郎も參りゆへと下知しけるはさう兩人蜂々峯筋と下り黒田村の觀音

峠と下立南の方と見渡をいへるさすしや東西の山
 谷峯々幾千萬といふ数もあつた松明の光り照
 輝その上木の本邊よりして此邊より人馬の馳
 違ふ音あひたしく聞えゆるあつたり兩人急を取
 て返す此由と玄蕃ふ告といふ玄蕃も案は相違を筑
 前守の軍畧と仰天し然り味方の一大事となりけ
 りり口惜や後藤又兵衛とゆらんふ欺どて時刻を
 延しゆとあを安うう夜に入て城と渡をとといひ
 筑前守の來着の期を知ての事なるへし何さ
 ば猿冠者といふと木下藤吉即その身の品よふ
 因さうけりあく追智恵のたけり男うふあは程の

人数あるへしと思われねとも正しく松明の数
 そへの何なる計策あり計知へり然り宵の
 程筑前守の勢只今着とすなるといひさるるも筑
 前守のいをとりあらんさるれ此陣中も筑前
 守り忍ひの者入るるも知るるも角
 も此處の足場あり人数と清水谷の峠と引あ
 け備と立んとししめげの原彦次郎安井右近と
 て七百余人と率ひ後殿の事と用意をし鳴呼玄
 蕃血氣よくゆる敵と輕んして此大敗と及ぶと天
 時の然らしむる處といふ云々筑前守の高運の
 いへば處と知へるさすしや筑前守の美濃部勘右

衛門と呼て此邊近道やあると尋あつて畏ゆと
て樵夫あり対知人もあつ山道と案内奉りける
ふより観音峠のあつて推あつて六七千許も
備と立ちひ黒鉄の者どめし出され茶白山の尾崎
と堀切をあつて忽し深さ一丈余口二丈むりりの
大堀と設けあつてその作車の神速あると實は人間
業といふれを筑前守の狭箱小尻をうけ黒鉄
ともの働と見物して居あふ由と聞とまゝ丹羽五
郎左衛門尉長秀山梨坂より賤嶽の東南へ押廻し
木と敲き石とあけ火の手を揚て関を作り寄
かともつとて鉄炮とい放たしめは是は夜陰の翻

玉あやまつて人と傷りんと恐危てなり此時玄蕃元漸清水
谷の峠とて備と立直さんとて一處は丹羽五郎左衛門尉
長秀の人数と前途と取らうと関の聲山谷と響りて南へ
廻り後の方より羽柴筑前守の勢胡の涌如く野あも山も
満々たれい若々い龍の雲と浮虎の風と起りあひひと
して関を作り螺と鳴とて百千の雷霆と異あつて玄蕃兵
共大は周章して騒動あつた然るに安井左近衛先
小人数と引上り跡のころし原彦次郎只一人鉄炮弓
鎗と三方へ引分其身中軍と備えて引退北國勢の中より
奇代の勇士やと褒ぬめのもつりけり又玄蕃元拜御
五左衛門呼て引後したる人数とすこめんとて見

て丹羽五郎左衛門今いふと時節ありとて鉄炮を打つけ
 ると下知しては輕とてめ頻に打せしむ北國勢とて
 崩と立谷は落崖に轉ふの其数とては攻むるに長
 秀なり進退の度を量ると老練の精兵なり原拜卿進
 む時の五郎左衛門兵をよとめてこれを追ひ切つて
 扣て筒先とてしめられを撃ち原拜卿引退んとこれに螺を
 吹楯とたゝして追ひ丹羽の勢の中にも坂井江口溝
 口村上のつとも名を得し侍あり塩合と討りて鉄炮を打
 け打つてを攻げると見く砦々ありも人数を出して峯
 峯尾崎と馳り鉄炮をふるもあつて打つけしむ
 い玄蕃元原拜卿と近付しむと西人の北國とて名を得しめ

のいふは此敵とて近くしむとこの口惜しむ日頃の
 勇氣の如何とてあらんとて五郎左衛門これに御存の
 如くしむて其う人数あり三十間四十間のうちへ敵を寄
 付けしむ今日めくの如く敵は近付らばとて我等
 運の末とあらむ此上の銘々命を棄る時節はしむて
 追拂て大将一人落し申へると云あり早く鎗を振て群ぐる
 勢の中へ突て入あはると幸は狂ひ廻りける有様狂象の山
 と裂は似て目覺しむ見えしむとも上方勢の雲霞段の如
 く入替く山も谷も充滿とてあやう玄蕃元自身と手と下
 カと盡し人数を引上んとあはるといへとも崩とて味方
 の勢は隔てし殊は土地の形勢ありとて踏止む

之助福嶋市松正則敵是場より退備と立めこ
めゆら攻む骨折申へ軍への備えさる
ふ利ありと兼々仰らるるものと早總くりりみ
追萌しゆと逸り切て申けるや筑前守聞て
莞尔と笑ひ其方共う骨折つとわあそ羽柴筑前守
といささしく遅く共今日中よの我手よ入つと
めのと一時二時ごゆ取たうとと其方ともと勞
らる何うせん今暫時待ゆへ我と猿といふそ
ゆ秋の木の實の熟て自と落る時節を能く
我と任せて休息し腰兵糧と遣ひ氣とのえや若の
の共といふれしうの何も木根岩稜より尻うち掛て

割子と開き岩間の水は咽とうるや北國勢の進
退と見物とうやあうて筑前守左右と願ひを
と我馬印とあの云蕃う陣の後なる峯より廻り
下知しあへる畏いといらるる直よ金の瓢箪の
大馬印と峯通しと押らるる差圖の處に立たりけ
と折節筑前守茶と喫るやと尋らるる陣中茶の
用意あく如何とくると見る処は長濱の百姓夫と
當りて堀と堀ぐるののち中よ竹筒と腰よさした
るありそれハ何とと尋ねる茶よていとゆひも
あく天目よなむくとほさておれと飲筑前守見
あふて其茶とそれと與ると宣ふとあり福嶋市松

おれを取次んと其男の側へ立寄けよ其男おど
へ餘りよ勿体やと辭退しけり市松更に聞入
とこれと持來りて筑前守の前は畏ど筑前守自
身は竹の筒より天目よ移し一口是を飲めよ茶
あはれ酒は酒はうしうは是は一段の茶なり銘
茶銘茶と舌打しあう快げよ二盃を傾け褒美の
後沙汰とへと宣ひなう其筒と天目と市松
み返しあくの市松おれを取その筒の臭と聞酒
の香いしとともぬ一瀧もはうりけり後日此
男は黄金三枚賜らうとあり折節徳永石見守參
上し伊賀守車去十二日死去と由と言じけり

筑前守何ともいれを聞ぬおめちし居る
ひしとうや石見守悪く謂てけりと思へる顔色
て退さけり去程は越前勢崩とけり上下騒亂を
し和と宗徒の大名の内なる一戦及み引
退さしを見て總軍浮足ありて騒さ立ける處は
玄蕃陣の上の峯は金瓢簞の大馬印とさしめ
しけり折しも廿日の月照合てさうめさうし
りしを見てその筑前守是を寄てけりと侍も雜
兵も一同は狼狽とさし限あり筑前守もさし此
体と見付たも有し螺と持來とと宣ふりけり近
習の侍螺とさしけり取て螺は序破急の吹様

あり若と兵士の序の螺と以て進こ破の螺とて鎗
と合せ急の螺とて戦ふとおめくともそれの僻事
よ秀吉若と時遠州の松下家ありて今川家の
螺と習ひたり是は了俊入道の法則と聞了俊筑紫
より下向して漂流の唐人三官とありひののり傳
るりしとなり柳序の螺とありありの緩ゆるよのひく
とたとくは柳の枝の風入當りて音あさりとて吹
たりあかの序の螺とて春の夜の短くと夢を驚り
秋の長さ夜の寝覺と誘ふて兵士と起出しと出
立しむると專と吹たり破とありありの松と嵐の音信
るりし如く颯々とほり吹たり是は寝おひと

若者あるひの勞ありたる老武者の氣を發さしむ
るためなれは物具しと鎗と執弓の弦とくひしめ
て手筈と知たり急といふ懸り口の螺なりたと
へは礮打浪のお寄てはさりと引引とて一丈
も二丈も高く打あひては渚をありひの引く
しと山となを勢と知たり然は此螺とて敵の
地と我地とあり我地と敵の地と見あをたりと云
り是はその進退の機とさしたる習いと知たり今日
の軍の窮鼠くへ川と猫とくむ安さお似て大に難く
六ヶ敷軍あり筑前守と勝しむるも負さるるも皆
是其方共の力なり但筑前ありての其方達よ其方

達り骨折て筑前といふとるなれに能々勉て過る
か天下と取も其方達と大名よをんと思へはなり其方
達なくして筑前一人生たりとも何れをんとしひか
めり佐久間陣と見こころ時ハ今そ夫めりことと
いふより早く螺と取て急を吹あつて今追息とつ
め拳と握り敵と白眼と扣居る小性馬廻りの若
の葦砂石と飛して駈出しめとも陣門狭けきハ
大勢一度と出りこく第一番ハ石川兵助貞友第二
番ハ加藤虎之助第三番ハ福嶋市松第四番ハ櫻井
左吉第五番ハ加藤孫六第六番伊木半七第七番糟
屋助左衛門第八番脇坂甚内第九番渡邊勘兵衛第

十番片桐助作平野九右衛門平野權平潮の満大浪
の寄る如くちとも擬議を以て走めり中ハ石川
兵助と平野九右衛門ハ長刀と以て駈向ひけるを
見て平野權平今日ハ鎗と以て第一ととへり長刀
ハ利あるすこひりとも九右衛門更ハ間も
入る水車ハ廻りて真先ハ進きたり此時修理少進
勝家ハ狐塚ハ屯りて堀久太郎小川土佐守り此岩と
あさく先手の勝軍とあめりて早々引上りてと
玄蕃ハ許へ使と立て頼りハ是と呼りとも玄蕃
聞入を勝家老たりと云て取合さる由と聞此上ハ
是非ハ及らば有無の一戦とあめりて思案と定

め二万ふ余る旗本勢の手配とひりける折節筑前
 守の吹螺と聞ておれハ尋常の内の吹螺とあり
 以正しく猿めと覺ゆるを後とて進めぬとを
 う立ける時羽柴方の砦く震動して鯨波の聲を
 合を螺と吹立し北越の軍勢とて筑前守
 おくまを駈付し覺えたんやとあれハ並々の敵
 ふあはれ容易く思ひ悔とりたるハ臍をうむ後悔
 あるへしと一人疑つ二人あやみけるあり
 我一陣に進ぶんとり人むり勝家も猥るあり
 うらハ總敗軍ふ及ふへし暫時見合然るへしと諸
 手と下知し進すめハ實あるる疑ハ敗北の

北といふ北越の兵權一時に碎りて勝家の身
 と亡しと至る筑前守の開運の天時といふものの
 の残念なりける次第なり又賤岳の峯筋へ向ひけ
 る柴田三左衛門勝政ハ三千余騎を一陣と守り
 堀切と前よあて敵と押え居たりし筑前守の
 大軍の押來ると見て味方の諸陣とて出で兄玄
 蕃う一万六千の軍勢衝々賤岳の北なる山へ引
 上り時勝政ハ餘吾の湖邊と上り來る敵兵と向て
 陣と立んとひりける處へ玄蕃より使と立て我勢
 ハ是より無難に引退たり其方の人數とも早々
 引上て一町を備と立ひてと志とて喚迎へし

共勝政のめし様爰と引退んとせし却て敵は追搦
らざ見苦しき目よある人も口惜りたるは
ひ切承るるぬと返答して使と返し其身は猶も敵
よ向ひ味方と静めて扣たりとせ

七本鎗三振刀の事

并拜御五九衛門退口の事

爰も玄蕃元ハ志津嶽の北なる山上へ引上り余語
の湖邊より押上る敵と押へたり三九衛門方へ
我勢ハゆる立固めたり急ぎ是を引取りへと使
者度々よ及ひし去り玄蕃元と一手よあらん
とせし所は筑前守夜の明ると待り木の本とせ

たるの暗さし押出し賤岳の南に旗幟と立させし
と弓鉄炮の衆は堀切のあはせし勢ハ只今引取
と見へしと急ぎ走り付打ふと使者母衣の者と
以ての心をしう心得いと申もをばひしと
引付堀切より引上りて規ひをまり打をしうの時
の間は手負二百余人よ及り敵ハ此手負と退ん
とせしものと隊伍とせし右往左往あると筑前守急
度見て小性共ゆるし法度とゆるとせし引付て
手柄をとせしと身を捫下知しあへしはも獅
子奮迅の勢とせしと進みけり山路將監正國ハ清
水谷よ於て一支とせしとえしとあへし鎗と打り

味方といひさめ山路將監正國あるとと名乗りけて
敵とよの處に加藤虎之助清正より來りて拜郷
五左衛門り鉄炮頭戸波隼人つとりの寄て鐘と打
ふり只一突ふと突くる清正あれを見て邪魔あるを罷
り退けといひさま戸波り腰の番と突けるより
馬より動と落あつといひ清正走寄て首と取あり仰
さ山路り立たると見るよりも返忠と山路將監
適とよのと突くる山路柄一丈穂長の鎗と握
ひ清正の例の青貝柄の片鎌とて志と互ひ突
合ける山路りつもの請身よむると以て鐘とて勝
めととや思ひけん山路飛しと組て勝負とを

んといひけるを聞て清正いりあも組アといひ
より早く鐘投とて無手と組生捕よをとと揉合け
る山路り今年三十八歳北國に聞え大剛のの
の清正の廿三歳勢長く骨太一正國心よれの様
我の返忠と一のの生捕とての憂目見んと疑
ひあ何とよも今と最期とわのひ定め捻倒さん
と身と入といひ清正の是非よ生捕り返り忠のめ
の見懲りよとんと押合揉合ける山路清正力勝りて
山路と組伏膝り引敷ける時正國もさる剛の者か
といひ清正の草摺とつうんてちとも放さる清正ふ
刀と抜とと心構たり清正くくといひ生捕みか

去の首と搔んとひける所は清正の兜
の鞆躑の枝より引とも放と正國得と
りと返さんとひける足と踏損し岸より下
へ身へ轉ひ雙手は清正の草摺と搔んで落する清
正手より忍ひの緒と引切の兜の躑躅の根の
うり清正の正國を引とて二三十間ありひと
も終は正國と捕て押え首と搔落し元の処へ立飯
り兜と着ひても進てうとさける爰は石川兵助の
三振刀の一人はれ敵多く討留たれとも雑兵を
とい首と取り鼻と殺て袋は入能敵のゆと四方と
見渡と折しもあは越前の勇士安井右近り弟同苗

四郎五郎大身の鎧を打ふりし石川は突てめ
兵助り太刀打の名人なり四郎五郎り出を穂
先とういくり川と付入て馬手の腕とあてり
み切の四郎五郎鎧取落し俯く處とたくりけ左
の眉尾より領の下より切下れととみと俯と押
えて首と取しうとも疵ある首なれ心よりうり
猶も敵と追討んと進し行處は并郷五左衛門と見
付て兵助聲けさるるも後と見とるののりか
返しとと呼りしと并郷より返り是は加州大
聖寺の城主并郷五左衛門久盈なりとのひさま
素鎧と以て突めくる兵助は太刀と以て切めくり

切あがり戦ふるとよ五左衛門も今日の限の軍あり何
うの命をわしむべき開き退つ一合一離水の月
の影あう波間の鳩の浮つ沈る習練の達人一
交もを以戦ふたりあくる處へ拜郷り家來十五六
人取てり前後より鎗と入けるより五左衛
門の其場と引退さぬ残る石川兵助只一人多
勢と引受切結ひ六七人と切伏その身も深手と負
しうの紅と染たる太刀と握り片岸の下み
倒れんと拜郷り即等へ主の行末の心元あさ打
棄て引退たり加藤虎之助清正福嶋市松正則は北
國の大勢と突あびけ切拂ひ猶もよ敵と討んと

あをさげると兵助さつと見付いりよ虎之助市松
あるら某の深手真ぬりてい叶ふへりけと聲
うけあれい兩人立止りて兵助り手の浅さをとい
ひつて人抱しつとも次第は弱りて既よ命終を
んと見つけるる両眼と活と見開き嗚呼仕合るる
うか命の際よ其方兩人よ逢しよ第一番よ切死に
石川兵助と大将の前よ披露し給と言さ息の
その儘絶たりけりこそ有つよあはれ兵助り
死骸と仮初よ打めくし印と立崩とやりし越前勢
と猶追掛て進みけるよ白檀とくこの滑皮の具足
の草摺と赤白一枚交ふ緘し天衝の前立打たる鬼

と著庭戸濱の西北より戦ふ武者あり福嶋市松と
 りり見付されぬ例の拜郷は脱をせしと近の
 り拜郷五左衛門と見ては一鐘參ると聲の下より
 突出の鐘の穂先の稲妻よ目下ろく間もあらずいふ
 そ一呼一吸をゆくと掛つりつ追合けるり五
 左衛門市松の鎗と請損し尻居よと倒しけれ
 い正則とりり走りて首と取鳴呼おしひるあ
 拜郷五左衛門久盈生年三十五歳身は北國ふ生立
 て武功とありり屍の余吾の湖邊に朽とも名
 い後の世は傳るれり正則の名譽の軍しとげりと
 勇とて戦ひけり

拜郷五左衛門久盈の長男治大夫後丹羽長重よ
 仕ふと云

甫菴本より原彦次郎安井尤近後殿へ鉄炮十挺弓五挺
 つ一所よりあを置是より引取下知次第とて有し
 うとも敵とて間を引付のり来て弓とたよ引ぬ
 る計は急なりけり原と安井と立ちまうり後殿をんと
 堅約して二度は尤も侍とてこのこと後殿も有け
 ん安井へ引取て退りしより原一人して前後より目とく
 るり尤右より下知退り青木勘七郎原勘兵衛長井
 五郎右衛門豊嶋猪兵衛就見深次郎就鳥津九藏毛屋
 新内あし引返り突倒し突退けるり原の勢と

ハ敵もあつてさうさうとやうに又柴田三左衛門尉の手
へ石川兵助真先は進みけるも福嶋市松加藤虎之助同
孫六平野權平脇坂其内糟屋助左衛門片桐助作と引
付したひひちのり佐久間玄蕃ハ拜郷五右衛門と呼先
手危あつて見ゆると能さうさうひひへと云う引へさ所
と不引して如斯成来り今更計ひう成めぬとあつてひ
しう共面もあつて引歸けしは浅井吉兵衛尉山路將監着
屋七左衛門尉も共々歸り合せしう拜郷真先は鎧と打こ
むと等しう石川兵助と名乗出鎗と合と戦ひ共終ふ
戦死してけり渡邊勘兵尉浅井喜八郎浅野日向守堀
切と跡見あり嶺とこと追立行し加藤虎之助同孫六

彼十人計の小姓衆をの聲と上とさやとあつて追
立行ものそ吉兵衛尉將監も余語の方ゆる谷へ心さ
ひ様と見るゆゑに渡邊勘兵衛浅井喜八郎見知たる
そと詞とけりういことさうえたりといひつ鎗と
以て向らんことをしう如何にたりけん二人共谷へ落
ちりひいと麓ありし大垣金右衛門が手へ討捕
しちのり柴田三左衛門尉ハ足ともさうさう手負とも
とも打つてひ二十町とけり引取けるも秀吉卿の小姓衆
ひこと付て追行所ふ前田又左衛門尉茂山の麓高き処
ふ二千余の勢と二段と備へ有しと便りしう佐久間久
右衛門よめる味方と左右もあつて踏止まりしう

う程ありしなり。玄蕃允今日の軍へさうへくちる
るへこそと大の眼よ角と立下知しける處は原彦
次郎進と出我々の左様よ存とさうしなり。今日の
軍へひりへゆく程敵の勢へゆき重ありて厚くは
味方の勢へ見るうちよ裏崩ととくく願とく
は只今一合戦へへ先ハ十万騎のうと云共某さへ
さ申へくひとのふとあり

重修真書太閤記九編卷之三終

